

光学天文連絡会会報

No. 21 (1983-4)

Group of Optical and Infrared Astronomers
(GOPIRA)

※※※ 第2 / 回運営委員会報告 ※※※

日時： 1983年3月23日 / 7時00分 - 19時30分
24日 / 10時00分 - 12時00分
13時00分 - 15時30分

場所： 東大天文学教室会議室

出席： 委員 = 安藤、石田K、磯部、市川、兼古、小暮、小平、佐藤修、
清水実、寿岳、田村、山下

(欠席) 西村、若松、家

委員外 = 奥田※、古在※、辻※、富田弘、野口※

(※印は3月23日のみ出席)

議題： (I) 会務
(II) 東京天文台有志からの動議
(III) 今後のすすめ方

会議は2日間にわたり、出席者の都合等で議題に多少、分離したり、前後するものもあったが、ここではまとめてかく。なお、各WGからの報告はなかった。

I. 会務

(1) 事務局報告

○次期運営委員選挙結果。(会報No. 20に掲載)

○会計中間報告。

会員数 173名、1982年度会費未納 43名

3月22日残高 現金 3,230

口座 17,150 (仙台) ※

24,145 (京都)

計 41,295 -----①

5月までに支出予定 53,000 -----②

①-② = Δ 11,705

※前受会費(1983年度分) 10名分を含む。

「会費納入のお願い」

1982年度会費未納の会員は早急に納入されるようお願い
します。

(2) 今後のスケジュール

○次期事務局。 木曾観測所にお問い合わせする方向で検討する。

○新旧合同運営委員会

5月9日(月) / 3時30分 - 7時00分、東大天文学教室

議事予定：事務引き継ぎ、

1983年度活動方針、

光天連総会準備、

各WG、新運営委員長、事務局長等選出

○光天連第5回総会予定

5月/8日(天文学会春季年会第1日) / 8時/5 - 20時30

福祉会館(A会場)

II. 東京天文台有志からの動議。

第1日(23日)は東京天文台古在会長が出席されたので光天連のこれまでの議論、天文研連(1月/2日)のまとめ、それ以後の東京天文台内での動きを中心に、光学赤外望遠鏡計画の全般的問題を検討した。

第2日(24日)午前中は問題全般の Free Talking をつづけ、午後には東京天文台内の新しい動きについての具体的検討及び今後の進め方を議論した。

議論の内容をはっきりさせるために、2日目の冒頭に司会者(小暮)がまとめた問題点をはじめに掲げることにする。

1. 光天連の方針と問題点。

光天連は2年余の議論を経て、天文研連に提案する計画案をいわゆる三本柱として、12月/0日の第19回運営委員会で次のようにまとめた。

1. 国内3m ○天文学はやれる。(銀河の構造を中心にする。)

○技術開発を重視。

○(ポスト岡山)

2. 海外中口径 ○海外への橋頭ほ。

○赤外・測光を中心とする。

3. NTT ○1990年代の実現をめざす。

○世界第1級の超大型望遠鏡。

この三本建て計画案のもつ積極面。

◎光天連の目標は Best Site、Best Telescope、(NTT) にあり、そこで世界第1級をめざす。

◎三本柱案は目標にむかって現情をふまえた上での具体的ステップを示す。国内3mだけをとりあげず、全体としてみれば首尾一貫しており説得力がある。

◎全国研究者(光天連中心)の2年余にわたる議論の積み重ねがある。

一方、光天連案には依然として多くの問題点がある。

◎光天連のこれまでの議論はワクにはめられた議論であった。(海外進出への壁が厚い。東京天文台は国内大型計画を基本とする等)。

◎光天連の計画等は甘えた議論の上に立っている。(三本柱を一つの計画として認めさせるというのはtime scale、予算等をかなり無視した議論である)。

◎天文研連で果して認められたのか。

多くの問題点が指摘された上で「第一歩をふみだすべきだ」という研連の結論をむしろ認められなかつたと評価すべきでなかつたか。

2. 東京天文台内の動き

83年1月2日天文研連以後、東京天文台内に光天連の三本柱案を批判し、新しい方向を指向する動きがはじまつた。

光天連案に対する批判の要点は2つある。

(1) 国内3m計画は魅力がない。

研連シンポ(1月1日)でも積極的な評価は少かつたし、このままで天文以外に持ち出しても支持をうるのが難しいという予測がある。

(2) 状況が流動的になつている。

一つは海外が難しいという壁の厚さと他は体制再編成への動きである。このような背景の下で、東京天文台が海外大型に積極的に取り組むという姿勢が浮び上つてきた。

しかし、これについても多くの問題がある。

◎光天連の三計画との関連

NTTは大幅におくれるか、實際上困難になる。

京都で具体化に進んだ海外中口径との関係、望遠鏡の技術開発、国内望遠鏡の必要性をどうするか。

◎状況の流動性に対する見通し

体制の再編成、海外設置へのfeasibility study、共にまだ不安定要素が大きく、そのため、望遠鏡計画そのものが大幅におくれることにならないか。

◎これまでの光天連の議論及び作業との関係

安易な方針変更は不信感につながる。

以上が3月23日の議論の過程で明らかになつた問題点のまとめである。以下、それについて主な討論を紹介する。

司会 天文研連以後の一般的状況報告。

Kd 東京天文台内の動きについて説明。

台長 国内3mを文部省などに持ち出した場合、「なぜ海外に作らないのか」の質問に答えられない。「海外に持ち出せるとしたらどうなるのか」を聞

- きたい。できれば光天連からの要請として出したい。
- 司会 海外に出すことは光天連の流れの幅の中に入るのか。
- Kd 本気で出すことを考えれば三本柱からはずれる。
- Kn どのような状況の変化でこのようになったのか。
- 台長 光天連案はシンポで歓迎されなかつた。その段階で考え直さなければならなかつたのではないか。
- Is. 海外となつたらNTTはご破算とするのか。
- Kd そこまでは考えてない。
- J 海外となればNITをあきらめたという印象を与える。
- To 国立共同利用研になればNTTの可能性もあるのではないか。
- J タイムスケールの話があまりない。いつの時点で世界に追いつくのか。
- To 海外のむづかしさを運営委員会はどこまで詰めて考えたのか。情勢は変わっている。
- O 状況の変化とは何か、はつきりさせるべきだ。
- 司会 体制はどの位のタイムスケールか。
- 台長 水沢の話は結論が出るまでに2年。
- 司会 海外に出すならば最初から体制の再編成が必要となる。
- 台長 国内3mでも体制の問題はでてくる。
- A 光天連はきちんと将来計画を立ててこなかつた。だから内部の団結もない。まず、実現可能性も抜きにして根本から考えてみるべきだ。
- 司会 光天連としてはここで三本計画でいくのか、白紙に戻してやり直すのか。若し、方向変換ならばその理由を十分討議し、外の人にもわかるようにはつきりさせるべきである。
- Kd 新しい方向の可能性であることを認めるべきである。
方針変更とは異なる。方針は1年くらいかけて検討すべきで、今日明日に変更というわけにはいかない。ここは台長がFeasibility studyをやつてよいかどうかという向に対してOKを出すか否かを考えればよい。
- Ta 憶測だけで議論できない。もつと具体的に、だれとだれが、何をどのくらいのタイムスケールで、できるかをもつとはつきりさせるべきだ。
- J 運営委員選挙もやり直すのが必要ではないか。
- Ii 海外に作るとなると国内の施設の充実、体制整備も重要になる。
- Kd 台長は海外につくるに当つて、国内にも必要があるという言い方はできる。
- Kd 海外中口径との関係でいえば、機関望遠鏡でなく海外、共同利用となれば、新しい共同利用研の中に吸収できる。プロセスについては実際にことが進んでみないとわからない。NITは国際協力になるかもしれない。
- J アメリカはナショナルプロジェクトが目標で、当面国際協力は考えていない。

- Is NTT へdirectに行けるかどうか評価しなおす必要がある。ただし、NTTとして何を考えるかにもよる。
- J NTT とは超大口径、有効 / 5 m以上、ただし、つながりは連続的である。
- Is NTT を直接targetにするかどうか、するならばどういうものにするか考える必要がある。
- A 天文台の近代化の努力が必要だ。
- Tm 天文台内のグループの形成がまだ見えてこない。
- Kd 行政レベルでコアを作ることが難しかった。
 なんとかやつてみようというふん囲気は出てきた。また他分野からのサポートの意向がでてきた。
- 司会 光天連の計画についてはすでにPR用のパンフレットもでき上っている。
 光天連の計画としてはよくまとまっている。
- Is パンフレットをどう評価し、どう扱うのか。
- Ii 当面パンフレットは重要である。
- 司会 天文分野まで光・赤外の将来計画をPRさせるために、このパンフレットを有効に使うべきである。
 …………… (以下24日の議論) ……………
- S 光天連案は研連で積極的に評価されたのか。
- Kn 運営委員会は研連の結論に対してどう総括したか。
- 司会 国内3mのゴーサインが出たと判断し、PRパンフレットの作成に進んだ。
- Tm 果して自分たちの立てた計画に自信があつたのか。
- A 一般会員は納得していない。
- Ic 本質的な議論に入らず、流動性のみを見るといふ方向にしばられてきた。
- Kd われわれは天文学の何をやりたいのかについて、光天連シンポのレポートは不十分であつた。
- 司会 光天連シンポでは国内3mで何をすることを前堤としてレポートした。それは研連の宿題に答えるためであつた。
- 司会 9月の運営委員会(木曾)が一つの岐れ道であつた。
 9月上旬の拡大研連で出された光天連案への評価をどう受けとめるべきかで意見が分かれた。そのとき、国内3mでいけると判断したのは東京天文台の委員が多かつた。
- Kd 実力を身につけるため、一步一步国内から出発していくことが大事だと思つていたが、現在でも状況は変つていない。海外に作れる実力があるかどうか、これからもつとつめるべきだ。
- Kd 海外といつてもまだ個人的レベルである。
 台内連絡会の議論から、光天連の意向をきくということができた。

海外の可能性もありそうだということで助教授以上で集まった。望遠鏡の形はまだ考えてないが、海外中口径とNTTとの中間、3m4連、シングル4mなどが考えられる。

III. 今後のすすめ方

- (1) 東京天文台内から出された「国内3mで文部省など外部に当る場合、海外の可能性をふくめてよいか」という動議について、これまでの光天連の三本柱計画案とも深く関係するので、運営委員会だけで結論をだすわけにいかない。当面は台長の責任で判断し行動してもらいたい。
- (2) 光天連としては、この問題をとりあげ、内部での議論をすすめる。当面のスケジュールは、5月9日の新旧合同運営委員会と5月18日の光天連総会である。場合によつては、7月頃シンポジウムということも考えている。
- (3) 方針変換となれば、この問題が起る前に選出された運営委員は辞任して再選挙ということもありうる。

追記 市川隆氏のメモによるところ大ですが、文責は私にあります。
市川氏に感謝します。 (司会者、小暮)

お知らせ

◎Grubb Parsons の D. S. Brown 氏が来日致します。5月/7日に東京天文台での Meeting の後、5月/8日あるいは/9日には、天文学会に出席する予定のようです。
くわしい日程は未定ですが、興味のある方は、磯部または小平両氏のいずれかとコンタクトして下さい。

◎次のようなワーク・ショップが開かれました。

「天体望遠鏡の性能に及ぼす自然環境効果」
/ 983年4月/3日 (水) / 0時~/7時
東京天文台講義室、

興味のある方は、世話人の石田^博一氏と連絡して下さい。

=====
事務局

〒980 仙台市荒巻字青葉 東北大学理学部天文学教室

光学天文連絡会事務局 田村 眞一

☎ (0222) 22-1800 (3324)

郵便振替口座 口座番号 仙台3-18/83

加入者名 光学天文連絡会
=====